



もくじ

展示紹介
葛屋版東海道と追分道の文化 広重〈視角〉の追求「橋、渡し、追分」…… P1
東海道の追分と信仰の旅路 …… P2
浮世絵こぼれ話16 田村通り大山道にみられる「渡し」 …… P3
二代目オニカゲ学芸員のページ⑨
旅の持ち物「関所手形」/浮世場なれ/編集後記 …… P4

葛屋版東海道と追分道の文化 広重〈視角〉の追求 「橋、渡し、追分」

会期

2023年3月7日(火)～4月23日(日)



【図1】歌川広重「東海道 七 五十三次之内
藤沢 四ツ谷の立場」嘉永年間(1848-1853)



【図2】歌川広重「東海道 六 五十三次之内 戸塚」
嘉永年間(1848-1853)

本展示では、藤沢市が所蔵する「東海道 五十三次之内」(通称:葛屋版東海道)をご紹介します。

歌川広重は、東海道の宿場を題材とした浮世絵の揃物を20シリーズ以上描き、その趣向や東海道の宿場を表現する〈視角〉は多様です。ここでの〈視角〉とは、ある場所の景観の特徴をとらえる広重の着眼点です。広重は自身の〈視角〉を活かし、宿場を様々な構図で描きました。

葛屋版東海道は、宿場そのものではなく、宿場周辺の施設に主眼を置いた作品の点数が、他の東海道を描いたシリーズよりも多いという、広重が自身の〈視角〉の多様性を活かしていることがうかがえる特長があります。例えば、藤沢を描いた【図1】では、四ツ谷の立場(現 藤沢市城南一丁目)を主題としています。また、戸塚を題材とした【図2】では藤沢側から大坂(現 横浜市戸塚区戸塚町)を通過して戸塚宿に向かう様子を描いています。

東海道の追分と信仰の旅路

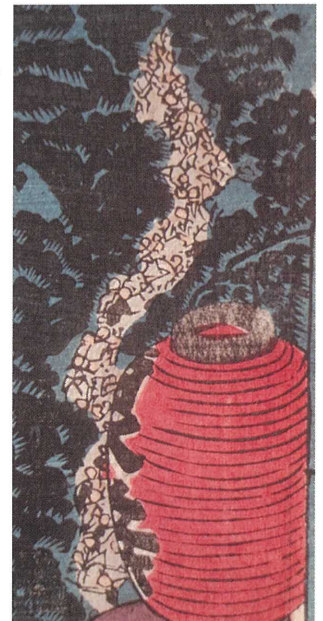
東海道の各地には別の街道へ分岐する追分おいわけがあり、中には江戸時代の人々の信仰と関係のある場所へ向かう追分もありました。今回はその中から二つの宿場の追分と、分岐した先の名所にまつわる信仰についてご紹介します。

葛屋版東海道 (p1、【図1】) では参詣者も訪れた、大山おおやま道の追分である四ツ谷よつやの立たて場ばが描かれています。立場とは、宿場と宿場の間にある休憩所のことです。旅人はここで休息をとった後、再び大山に向けて出発しました。



【図3】歌川国芳「大山良弁滝」弘化4年-嘉永5年(1847-1852)

古来より霊場として知られていた大山せきそんだいごんげん(現伊勢原市)の石尊大権現を参詣する大山詣りは、江戸時代に庶民の間で流行しました。江戸からの参詣者は、まず両国川りょうごくがわ(現東京都墨田区両国)で水垢離みずごり(神仏への祈願や、寺社への参詣の前に、冷水で身を浄める行為)を行ってから出発し、大山に到着した後は登拝の拠点として大山の御師おしの家に宿泊しました。登拝する当日には、良弁の滝ろうべんをはじめとした大山の麓こりばにある垢離場ごりばで再び水垢離を行い、身を浄めてから登拝しました。【図3】の浮世絵は、大勢の参詣者が良弁の滝で水垢離をしている様子を描いています。大山に参詣できるのは6月末から7月半ばまでの例祭が行われる短い期間であったため、大勢の参詣者が殺到していたことが垢離場の様子だけでなく、遠景に見える参詣者の列【図4】からもうかがえます。



【図4】大山詣りの参詣者の列 (【図3】部分)

また、掛川宿の大池村おおいけむら(現静岡県掛川市)には、秋葉山あきはさんへと向かう秋葉街道あきはかいどうへの追分おいわけがありました。秋葉山では、古来より火伏ひぶせの神として崇敬を集めていた秋葉権現あきはごんげんを祀っていました。江戸時代には秋葉講あきはこうが各地で組織され、秋葉権現への代参だいさんが行われました。また、参詣者の中には、鳳来寺ほうらいじ(現愛知県新城市)へと向かう人もいました。そのため、江戸時代の道中記の中には「秋葉鳳来寺道あきはほうらいじみち」として、双方を参詣できる旅路を紹介しているものもあります。

【図5】の画中には、秋葉権現の鳥居じょうと常夜灯やとうが描かれています。秋葉街道の常夜灯は道標どうひょうとして街道沿いに建てられたものの他に、地域の安全を祈願して住民が建てたものなどもあります。



【図5】歌川広重「東海道 二十六 五十三次之内 掛川」嘉永年間(1848-1853)

田村通り大山道にみられる「渡し」



1 ページ目の歌川広重「東海道 七 五十三次之内 藤沢 四ツ谷の立場」に描かれているように、藤沢宿から東海道を西に進んだ先には四ツ谷の追分がありました。ここは大山道と東海道の分岐点となっており、ここから大山に行く大山道は「田村通り大山道」と呼ばれています。



江戸時代当時は、大山詣りの帰りに江の島に立ち寄って江戸に戻る、というルートが人気だったといえます。つまり、大山から四ツ谷ま

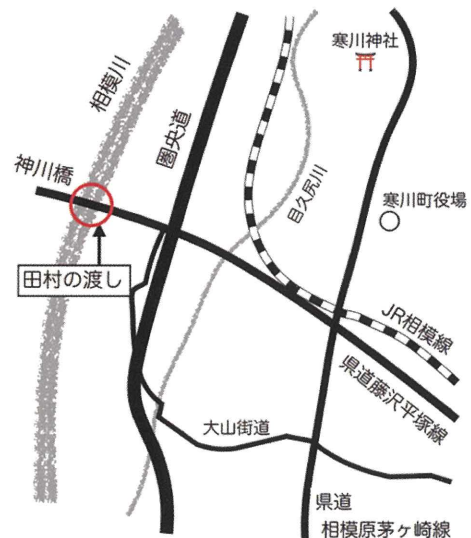
【図1】歌川広重「大山大道中張交図会」
安政5年（1858）頃

【図2】歌川広重「大山大道中張交図会」（図1部分）
遠方に見える静かで雄大な佇まいを見せる山が大山。

では田村通り大山道を、そこから藤沢宿までは東海道を通り、藤沢宿から江の島道で江の島に向かっていったということになります。この道中にも様々な「橋、渡し、追分」がありますが、今回はその中でも田村の渡しを浮世絵とともにご紹介します。

【図1】は歌川広重「大山大道中張交図会」のうち3枚目の図です。これは日本橋から大山までの土地に関する名所や名物を各5図ずつ収めた合計3枚のシリーズで、本図の画面下部右のコマに田村の渡し【図2】が描かれています。藍色のぼかしが用いられた、穏やかな流れを感じさせる相模川を、旅人らしき人々が西岸の田村に向かって舟で渡っています。当時、田村には厚木道も通っていたこともあって旅籠や立場などで賑わっていたようで、本図にも屋根が密集して建ち並ぶ田村の宿場の様子が描かれています。

現在、ここには神川橋という橋が架けられていますが、相模川の西岸、かつての田村の方には田村の渡場があったことを示す石碑が建てられています。



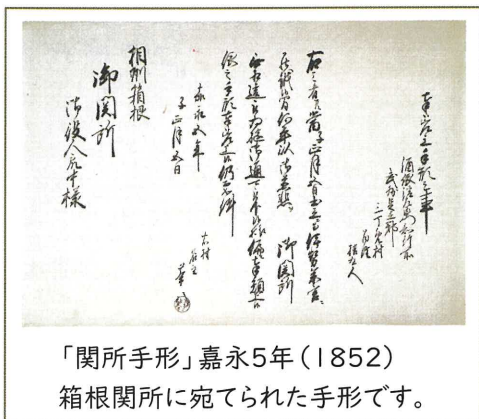
【図3】現在の田村の渡し周辺図
藤澤浮世絵館から北東に15分程度歩いた先に四ツ谷の交差点（かつての四ツ谷の立場）がある。そこから大山街道を西に向かって2時間ほど歩くと、田村の渡しに到着する。



二代目オニカゲ学芸員のページ⑨ 旅の持ち物「関所手形」

皆さん旅行はお好きでしょうか？観光したり、現地の名物を食べたりなど旅行ならではの楽しみってありますよね。オニカゲ学芸員はいつかヨーロッパ旅行に行くことを夢見ています。

実は江戸時代後期には旅行が大ブームでした。現代とは交通手段や持ち物など違うところもありますが、江戸時代の人々も同じように旅行を楽しんだようです。今回は江戸時代の旅の持ち物の一つである「関所手形」について少しお話します。



「関所手形」嘉永5年(1852)
箱根関所に宛てられた手形です。

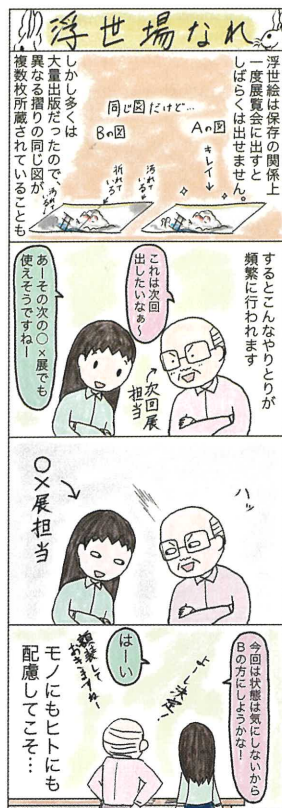
江戸時代には、日本各地に関所と呼ばれる人々の往来を取り締まる施設がありました。関所手形とはこの関所を通過するために提出する許可書です。全ての旅人の必需品ではなく、江戸に運び込まれる鉄砲を運ぶ人、江戸を出る女性、怪我をしている人など一部の旅人のみ必要でした。

特に江戸から出発する女性への

関所の取り締まりは厳しく、これは人質として江戸に住んでいた諸藩大名の妻子が国元に逃げてしまうのを防ぐためだったと考えられています。女性は関所手形の一つである「女手形」に氏名、旅の目的などの情報に加えて見た目の特徴なども細かく書かれ、関所で確認されました。

特別な条件のない一般男性や江戸に入る女性は関所手形を必要とせず、「往来手形」という現代におけるパスポートのような書類を見せることで通過できたようです。文久3年(1863)以降は関所の取り締まりが緩和されましたが、かわりに男性も関所手形が必要になりました。

藤沢市は、箱根関所宛の関所手形をいくつか所蔵しています。しかし、その中には文久3年以前に発行された、一般男性のものと思われる関所手形も含まれています。関所手形が必要でなかった旅人も、関所をよりスムーズに通過できるように、関所手形を持つことは多かったのかもしれませんが。オニカゲ学芸員も現代の手形であるパスポートを使ってスムーズに旅に出かけたいと思います。



編集後記

今回の展示では「蔦屋版東海道」の〈視角〉に注目しましたが、広重は様々な〈視角〉から幾度も東海道を描いています。同じ藤沢宿の図でもいろんな角度から宿場を捉えたり、四ツ谷の立場や南湖（現 神奈川県茅ヶ崎市）といった宿場周辺の風景を描いたり、と作品ごとに着眼点は様々です。広重は自身の描く東海道シリーズがマンネリ化しないために〈視角〉を変える工夫をしたのかもしれませんが。なじみ深い地域も見方を変えれば、新鮮に見えることを広重は教えてくれるのです。

編集・発行：藤沢市藤澤浮世絵館

【住所】〒251-0041 神奈川県藤沢市辻堂神台2丁目2番2号ココテラス湘南7階

【電話】0466-33-0111 【FAX】0466-30-1817

【開館時間】10:00~19:00(入館は18:30まで)

【休館日】月曜日(祝日、振替休日の場合は翌平日)

※その他、展示替えのために休館日がございます

【HP】 [藤沢市藤澤浮世絵館](#) で検索 🔍

